

文化芸能

毎月最終土曜日に掲載します

# 美術評

ゴッホとゴーギャンは、どちらも印象派のモネやピサロから大きな影響を受けた。また彼らには、フランスの田舎や日本などの異文化にあこがれるという共通点があった。そういうふたりの画家は、パリで出会い意気投合して南フランスのアルルで共同生活を営むものの、わずか二カ月で破綻し、ゴッホは耳切り事件を起こす。その後ふたりは会うことはなく、ゴッホは一年半後に自殺し、ゴーギャンは南太平洋のタヒチに行って制作を続けた。

## 2人の軌跡 作品で追う



フィンセント・ファン・ゴッホ「自画像」(1887年4月)油彩・厚紙・厚紙・厚紙 ©Kröller-Müller Museum, Otterlo

品にはじまるが、ふたりが知り合ってからがヤマ場となり、特にアルルでの共同生活のときは一日一日の行動が明らかにされる。そこにロートレックら友人の画家たちや、ゴッホの弟で画商のテオなど関係人物がからみ、ゴッホ

がこだわって描いた椅子などのアイテムにも着目して、まるでよくできたサスペンスドラマを見るかのような。ゴッホ「自画像」(一八八七年)は、彼が数多く描いた自画像のひとつである。印象派の影響を強く受けた時期の

作品で、色は明るく、細く短い線のような筆触を用いている。彼が他の手法で描いた自画像や、ゴーギャンの自画像も展示されており、見比べることができる。

愛知県美術館 ⑧ハローダイヤル050(5542)8600 3月20日まで

### ゴッホとゴーギャン展

初代 長次郎 黒樂茶碗 銘 大黒 重  
要文化財 桃山時代(16世紀) 個人蔵



### 茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術

文の「無一物」(頼川美術館蔵)など長次郎の作を評して吉左衛門は「言葉や図で伝達することのできない造形」と図録に書く。まさにその通りではあるのだが、それでもささやかな報告を試みたい。

実際の「大黒」は、その銘や印刷の写真から受けるイメージより明るく、釉薬の色合いにはかなりの濃淡がある。そこに地肌が星のように顔をのぞかせ、碗の表情に無限の変化をもたらす。形は微妙にゆがんでおり、茶人の口が当たる口縁にはぼつりと厚い箇所や薄く削がれた箇所がある

京都国立近代美術館 ⑧075(761)4111 2月12日まで

陶芸を愛する人に、また茶道をたしなむ人に「ぜひお出かけを」と呼び掛けたくなる展覧会。いや、むしろそのどちらにも興味がない人にこそ見てほしい気がする。

## 利休がめでた名品並ぶ

(三品信)

東京国立近代美術館に巡回して開かれる。